

被災地より(大船渡)

一菅原 聡子一

その1：状況

大地震の中、停電になった。「これは、断水にもなるのでは？」と思い、バケツ、やかん等に水を溜めた。一応、持ち出す荷物をまとめ、玄関で、うろうろしていると、音の世界が変わった。銭湯や温泉のような、水の多い場所のように響いて聞こえてくる。遠くで大勢が叫んでいるようにも聞こえる。

何だろう？とは思ったが、様子を見に行くわけでもなく、他人事のように聞いていた。

と、お向かいの奥さんが息子さんと、出て来て真剣な顔で「逃げて！逃げて！」と私を促して下さった。

「えっ！逃げる？どうして？」

小道へ出ると、狭い視界に、二階建ての家の高さの水が、カーッと内陸部へ向かい、家などを押し流しているのが見えた。

「津波だ！四歳の時見たの(チリ地震津波)と同だ」と思った。

指定されている高台の公園に避難すると、近くのスーパーや、工場で働いていた人たちが何も持たずに、身ひとつで、走って逃げてきて、どんどん増える。「これは一大事」と改めて思った。

後で知ったのだが、職場から、車で逃げたか、走って逃げたかが、生死を分けることになったそうだ。私が、高台で見たのは、必死で走って来た人たちだった。

二軒隣りがガレキの山というギリギリセーフの状態、借家の自宅は残ったが、津波警報が解除になるまで、高台に避難していなければならない。化学物質過敏症の私は、避難所の中に入って留まることは無理だ。

避難所は、禁煙なのだろうか？その他、ファブリーズ、整髪料、化粧品、殺虫剤、芳香剤等々日常的な臭いで具合が悪くなる。大勢の人が集まれば、その人たちの髪や着衣に付着した化学物質も増える。それに耐えられないのが、化学物質過敏症 MCS (Multiple Chemical Sensitivity=多種類化学物質過敏症)。

昨年末から、外出する時は、酸素吸入をするように医師から言われている。酸素ボンベは2時間半で使い切ってしまう。

空になったら酸素の充填が必要になるが、その会社も流された。手元に残った酸素は4本のみ。(つづく)

shirasagi77@ezweb.ne.jp



▲この船が、看板に乗っていました。うちから、二軒隣が道路そして、JRの線路から、二階建ての家の高さがありますが、すっかり、ガレキで埋まり、二階建ての事務所と船が。

その2

避難所に行けない私は、高台の知人の家に泊めていただいた。こんな非常時にと、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。が、なすべき行動は、病気の私が留まれる場所にいること。凶々しいなと思いながら、一泊させていただく。海峡を渡る船のような、大きな余震に揺れては、度々、ロウソクの火を消した。非常時なのに、何かと「聴子さん、聴子さん」とお客様扱いして下さるのが申し訳なく、外が明るくなると、お礼のメモを残してその家を出た。

「第二波は来なかったのだから？」恐る恐る高台から覗くと、借家は無事だった。二軒隣りから、町ごとガレキの山。戦場のようだ。電柱も倒れ、アスファルトの道路には、段差ができていた。借家の周囲は避難している人たちが多かった。津波の翌日は、別の知人宅にお世話になった。やっぱりこのお宅も、非常時なのに、お客様扱いして下さり、申し訳なくて翌朝早く、借家に戻った。

停電で、空気清浄機は使えなかったが、周囲が避難して留守の分、排出される化学物質が減る。快適だ。もうよそ様には頼らず借家にいることにした。お向かいの何軒かと、一軒しかない右隣り、後ろの二軒、が避難している中、自宅で過ごした。停電で、断水で、固定電話も、携帯も使えなかった。女性が、一人でいるなんて誰も思わないだろう。二匹の猫もいる。それほど怖いとは思わなかった。仮に怖いという感情が湧き出たとしても、避難所の中に、入って留まることはできないし、この非常時に知人宅を頼るのは、厚かましい。過敏症の私が、なすべき行動は、自宅にいて、人様に迷惑をかけること。



▲この二階建ての事務所は、バス通りを越えてやってきました。歩いて、五分はかかる場所がありました。この看板の隣には、船が、乗っていて、それは見事というか、津波の怖さ、大きさを知りました。

その3

津波から二日後に、停電で、断水の自宅に戻った。市の広報が、山側の消防署から、老人介護施設まで、電気が復旧したと伝えた。それを聞いた私は、ブンブン怒った。消防署とその近くの市役所までは充分理解できる。なぜ、老人介護施設までの復旧なのだろう？それはきっと、市長のおじさんが、経営する介護施設だからだろう。不公平な臭いがブンブンした。すると、CLで教わった「人生は、ときに不公平なもの（自分側からみて）。不公平さに慣れる」を思い出した。不公平さが人生と、ブンブンを受け入れ、無視することにした。



続く

[➡ 目次へ戻る](#)